

# 学校と新型コロナ禍

先生へのアンケートから

およそ2年におよぶ感染症対策と併行した学校生活。その実際を先生たちに聞いてみました。

## 気になる子どもたちの姿

●教師のマスクをはずそうとする子どもたち。きつと今まで相手の表情を見て、おこっているのか、など判断していた子(特に自閉の子)がマスクで表情が読めず困っているのではないだろうか。

(特別支援学級)

●マスク越しでのコミュニケーションは、聴覚障がいのある子どもたちにとっては、かなり大変だと思ふ。学校では、教員は生徒とコミュニケーションをとる時は、自然とマスクをとってマウスシールドやフェイスシールドを着用し、手話や口話でやりとりしている。

ジをもちづらかった。(こ)学校)

●給食時間、以前は子どもたちが、楽しく話しながら食べていたが、今は子どもたちが話し出すと、「静かに食べようね」と声をかけないといけないことがある。なんともつらい。(特別支援学級)

●感染状況に応じて、その都度どのようなことが可能か、判断するのがむずかしい。また、感染がおさまってきたときにどれくらいの形、時期で通常の教育活動に戻せるかの基準、判断がむずかしい。修学旅行などは、行くことのできる地域が限られ、大切にしていた平和学習にとりくめなかったり、児童生徒に何度も行き先の変更を伝えなければならなかったり、計画も何度変更しなければならず大変であった。そのなかでなにを大切にしていくなのか、県内での活動であってもつけたい力を共有していく必要を強く感じた。

(盲学校)

●給食指導の配慮として対面での食事をやめ、席を分散。指導中はビニール手袋、フェイスシールドなどを着用。黙食指導。子どもの

とが多いが、筆談やジェスチャー、スマートフォンに入力しながらのやりとりなど、マスクをしたままでもコミュニケーションがとれるよう、コミュニケーション手段のバリエーションを増やす必要性をコロナ禍前よりも強く感じている。

(こ)学校)

●感染症に対する恐怖心が気になる。不安のあまり、周囲にも必要以上に消毒を求めて生徒間でけんかになる、風邪をひいている友だちに近づこうとしないなどの姿が見られる。正しい情報を伝えながら感染症対策をしないといけないとあらためて痛感させられる。

(特別支援学校〈知的〉中学部)

係を止めて教員が準備や片付けに当たる。

(盲学校)

## ICT活用のジレンマ

●ICTの活用自体は、肢体不自由のある子どもたちの将来を広げていくものだと感じている。しかし、「子どもたちにとってどうか」という検討はなく、「使っていくことがこれからの教育」という流れになつていっていると思う。その結果、使ったことが教員評価の対象となり、子どもたちは、スイッチを押せたこと、画面を見られたことなどの行動のみが評価となつてきてしまっている。子どもたちの思いやねがいはなく、本来的な教育の目的も忘れられていくのではないかと感じることもある。子どもたちは、活動として「できてはいる」が、「理解できていない」ことがある。ICTを活用していくことは大切と思うが、なんのために活用していくのかを今一度問い直す必要があると思う。

(特別支援学校〈肢体不自由〉小学部)

●GIGAスクール構想が急速に進められ、パソコンやタブレット

●人とかかわりやすささまざまな体験を大切にしたい子どもたちにとって、かかわる人やかかわり方、体験の機会が制限されることが気がかり。

(特別支援学校〈病弱〉小学部)

## 家庭への影響

●経済的貧困家庭に対するケア。支援機関と連携して給付型の公的援助を案内している。コロナ禍によってより深刻である。

(特別支援学校〈知的〉高等部)

●保護者同士の交流がもたにくく。学部懇談や学年懇談がしにくいので、進路など大事な話をする機会がつかれない。情報提供もできていない。

(特別支援学校〈知的〉中学部)

●マスク着用やワクチン接種について、過敏性や恐怖心によってできない人もいる。ある保護者さんにお話を聞くと、学校の中でも気を遣ったり、肩身の狭い思いをしたりすることがあるということだった。直接言われるわけではないが、周りの視線が「ちゃんとさせろよ」と言われているように感じ

を活用しての教育内容が求められているが、家庭での条件の差や本人の実態の差がそのまま教育の格差につながりかねない心配している(盲児で知的障害を重複する子どもの場合、ICT機器を活用しての指導はかなり困難がある)。(ICT機器の急速な導入により、それらの活用方法を身につけるのに多くの時間がかかる。また、保護者へ説明をしなければならぬ事柄が多く、対応が増える。その割に児童に活用できる部分が少ないことがたいへんジレンマとなる。

(盲学校)



## 教員の仕事、働き方の変化

●働き方改革と相まって、必要以上に行事の縮小や簡素化が進んでいないか心配。行事ごとにその意味や意義が込められていたはずだ

ると。最近ではワクチンを打つたら○ができるといったワクチンパスポートなどの考え方が大きな流れとなっているが、そういった同調圧力によって、より細かな分断がなされないか(孤立する人が出ないか)とても危惧している。

(特別支援学校〈知的〉中学部)

## 行事や授業等での変化

●学習発表会や授業参観をYouTubeで実施(1学期まで)。2学期は事前申込制、きょうだいで在籍している児童・生徒を除き、一世帯1人のみ、というルール。(特別支援学校〈知的〉小学部)

●始業式・終業式・修了式については、事前録画をクラスごとにタブレット・パソコン画面で見られる形で実施した。

(特別支援学校〈知的〉小学部)

●高等部の産業現場等における実習は、実習に出ることができなかつたり、コロナの関係で事業所から受け入れ不可となつたり、生徒の進路選択において、体験的な学びの機会が少なく、生徒自身が自分の進路について具体的なイメー

が、それら抜きに、やってみたら楽だから今後もこのやり方でいい、という意見は多いように感じる。学びの主体が子どもたちである限り、そこを抜きに考えてはいけないのではないかと感じる。いろいろな教材の共有化をする等、教員同士のかかわりを増やした方が業務改善につながると思う。

(特別支援学校〈知的〉中学部)

●以前にも増して業務が増えた。教材作成や授業準備、そのための話し合いの時間がなかなかもてなくなっている。

(特別支援学校〈知的〉中学部)

●大きな行事が中止になり、本校で行事を経験していない教員も増えてきた。合宿、校外学習含め、さまざまな行事を子どもたちも教員も経験できないことが残念。

(特別支援学級)

●生徒もそうだが、教員も目に見えないウイルスに対する不安があり、教員間で合意して、授業、実習、行事を考えていくことに非常に時間がかかる上、精神的にも疲弊している。

(特別支援学校〈知的〉高等部)